

# 琉球大学学術リポジトリ

## 生命と音楽と教育についてのとりとめない話

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部音楽科 公開日: 2011-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永山, 哲男, Nagayama, Tetsuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/20069">http://hdl.handle.net/20.500.12000/20069</a>

# 生命と音楽と教育について

## のとりとめない話

琉球大学教育学部音楽科  
永山哲男

### 序論

21世紀を目の前にして、世の中が慌ただしくなってきた。教育を取りまく環境だけ見ても、さまざまな教育改革が、大詰めだし、学校教育現場では、新学力観をめぐる論争も激しい。大人社会では、連立政権だとか、就職不安、子供社会では、非行の低年齢化から大人顔負けの犯罪行為現象と、夢も希望もない世紀末的な諸々の流動化現象が、限りなく進行している。私が、指導している大学生たちの大半が、画一的で無表情で、中にはく生まれて損した>と真顔で話す学生も出てきた。事は深刻である。もはや夢を語る教育・指導は無理なのだろうか……と悶々とする日々の中で、ある事に、妙に興味を覚えた。何故、人は地球上に、かくも増え続けてきたのだろうかという事である。人類がこの世に誕生してから、見果てぬ夢を追い続けた、我々の祖先は、それらをすべて実現させ、文明や科学を発展させてきた。しかし、これだけ進歩してきた、現代の長寿社会で、逆に、人間疎外や、社会不信が表面化してきた。地球上に余りにも人間が増え過ぎた事と、現代の喧騒な社会に到る歴史的過程がどう関連しているのか、等が気になり出したのである。人類が地球上に、かくも広く分布するようになった要因を、生物学的ないし発達心理学的に捉え、人間の本性を調べながら、21世紀の未来地球環境や、教育の未来像などの諸々を、歴史を横断しながら考えてみようと思ひ、世界白地図を準備して、その中に、人類誕生から人種の起源、民族国家の成立から民族大移動など、人類が地球上に広く住み着くようになった先史人類の足跡を、ある本<sup>(1)</sup>を読みながら、書き留めてみた。440万年前に、最初人類の祖先(猿人)が東アフリカで誕生してから、旧人、新人へと進化していく著述の過程で、私は自分の祖先たち(モンゴロイド)の素晴らしい地球進出の足跡を書き留めた文章と地図に目が釘付けになった。要するに、最後の氷河期が終わった1万2千年前に、ベーリング海峡から、北米大陸に渡ったモンゴロイドが、南へ南へと移動し、3千年後に、南米大陸の南の端まで、移動していった事、時代が下って、4千年ほど前に、フィリピン付近にいた東アジアの海人が、やはり、3千年の間に、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシアと、ほぼ南半球全域の端から端まで移動していった事の、2つの記述に目が釘付けになったのである。なぜ、人類は、これほどまでに地球上を、海であれ、陸であれ、移動していったのか??……。実は、ここからが本題である。

### 1. ヒトがサルから分かれた時

人間が、霊長類の中で、猿から進化した事は既定の事実であり、チンパンジーやゴリラと人間の差は、誰の目にも明らかである。しかし、人と、チンパンジーやゴリラを、遺伝子の全塩基配列で比べると、99パーセントは同じであるらしい。つまり、霊長類の中から、類人猿と人間が分かれたのは、DNAの問題とは別のメンタリティの問題という事であるらしい。四本足の猿から、二本足で立って歩く人間になった時、最初の原人の脳の中に、すでに猿とは異なる新しい意識が芽生えていた。それは、視界の先に、何かを見つけ、動き回り、それを見届けようという「興味心」であるらしい。片山一暁<sup>(2)</sup>は語る。「人間にとって、動き回るという事は、人間自身の成立の問題に絡んでいる。人間は本質的に動き回る。

その先に何かがあれば、動いていこうとするのが人間である。それが情報であれば、未知の情報を求めて移動していく。その事は、人間の雑食性とも深く関わってくる。多様な食物に適応でき、雑食を消化する能力に文化が加わって、生で食べられない物も、食料に変えてしまう。結局、人間は、移動する事によって、チンパンジーやゴリラとは、別の次元に移ってしまった。脳が大きくなって、汎地球的な動物に成り得たことの最大の原因が、彼方に移動していくという事であった。人間は汎地球的な動物になる前に、脱熱帯を敢行する。トロピカルな環境条件を脱出する。そのモチーフになり、モチベーションになったのが「彼方に何かあれば、行ってやろうという＜好奇心＞だったのではないか」と。つまり、この好奇心が、人類を何千キロにも渡って、地球の隅々まで移動させてきたのである。人間が、後に、村や都市国家を築きあげ、文明や科学を発達させてきた根底には、この好奇心が、強く働いている。こうしてみると、古代人には、現代の文明社会の若者たちが失ってしまった、よりよい生活へ向かう人間の本性が垣間見える。逆に言うと、無気力で無関心で、意欲のないように見える若者たちの脳の中にも、この本性が受け継がれているという事である。従って、今の社会や教育が、あるいは、我々、大人たちの無責任さが、若者たちの＜人間として本来持っている好奇心や意欲的な本性＞を押し潰してしまったのではないかと考えることが必要である。

## 2. 現代の教育不安とその解決について

現代は、大人も子供も不安を抱えている。大人は少子化傾向による将来の年金制度への不安があり、21世紀を背負っていく現代の青少年の頼りなさに、将来の社会を託す信頼感を持ってない。しかし子供たちの不安は、大人のそれを遥かに越える。子供は、将来でなく、現在進行の不安を抱えている。教育アドバイザーの岸本裕史<sup>(3)</sup>によれば、「日本の未来を考える時、国民のすべてが、高い知性と教養を身につけ、芸術や文化を愛し、平和や人権の面で、世界の最も優れた水準の働き手を生み出す、そんな国になって欲しいと願っても、現実には、絵に書いた餅になってしまっている。今、多くの青年、そして学生は本を読まなくなっている。いや正確には読めなくなっている。電車の中で、六尺余りの若い会社員が、大きく股を広げ、恥ずかし気もなく少年マンガ雑誌に読み耽っている。テレビ、ファミコン、マンガと三種の神器ならぬ三種の呆器は、この国の子供から大人に至る多くの国民の頭脳を劣化し、呆化（ぼけ）させていっています。このまま推移すれば、親より子は馬鹿になり、子より孫は阿呆になり、日本列島一億三千万人のうち、大宅壮一氏が予言していた一億人総白痴化という、亡国への道を辿ることになるだろう」と警告している。その責任は「国の文教政策と経済政策に原因がある」と行政への集中砲火を浴びせている。その具体的記述について<sup>(4)</sup>は、ここでは触れないが、他でも、最近の薬害エイズ問題や、0-157による食中毒、住専問題など、行政への不満は最高潮に達した感がある。政府も、やっと行政改革に着手し始めた。話を本筋に戻すが、教育不安の最大のポイントは、低年齢層の非行の悪質化である。この子供たちの95%が、低学力の子供たちで、学校教育から、はじき出された落ちこぼれの子供たちであるらしい。落ちこぼれといっても、知覚能力には何ら遜色はないらしいので、落ちこぼれた一方で、大人顔負けの犯罪を引き起こす。もう一方では、塾通いの勉強漬けの子供たちがおり、詰め込みの勉強に追われている。その中間には、無気力、無関心、無責任の三無主義の子供たちが、ぼんやり家で、テレビやマンガを読んでいる。運よく入試に受かった大学生たちも、入学後、急に勉強意欲を失う。アジア各国からの留学生たちは、口を揃えて「今、私たちの国は後進国で貧しい。しかし日本の大学生は、ちっとも勉強しませんね。ドライブ、アルバイトにナンパ・ばかりしています。30年したら日本は、だめになっています。私たちの国が、ずっと良くなります」と断言するらしい。岸本氏は、熱っぽく語る。「子供たちを将来、社会に責任を持って送り出す為には、生きる力としての三つの基礎能力を付ける必要があります。第一が基礎的な体力・運動能力です。体が弱くては、生きる力も弱くなります。気力も乏しくなりがちです。第二が、感応表現能力です。人の言う事が分かり、共に喜んだり悲しんだり出来る力、他人に自分の思いを伝え、考えている事を的確に知らせる力です。大人の世界では、教育活

動、政治活動、芸能活動にこの能力が特に必要とされます。第三が基礎学力です。読み書き計算を基礎とした能力です。認識の発達の上で、なくてはならない能力です。現代社会を把握洞察し、民族や人類や環境の問題に思いを馳せめぐらせたり、自らの未来を切り開いていく為には、高度な科学的な知見を要します。それには深くて専門的な学識と、広くグローバルな視野が必須です。劣弱な基礎学力では、とてもそういった能力を身につけることは出来ません。それどころか、いつも運命に翻弄され、社会に対しては無力な存在となっていきます。人が自立して、自ら己の運命を開拓していく時、世の中が見えていなければなりません。世の中が見える力は、基礎学力を土台としてこそ、はじめてまっとうについてくるのです。今日、基礎学力の有無は、生きていく上で決定的な条件となっています。子供たちは、思春期ともなれば、感情の動乱の真っ直中に放り込まれるのです。独立心も自尊心も強まります。異性からの評価にも敏感になります。恋もします。傷つけられもします。卑下もします。又、青年期特有の情熱が、受験勉強以外の分野に向けられた時、成績は下がります。ある子はマイコンに、ある子はステレオに、ハムに、文学に、政治に、ディスコに、オートバイに・・・と、熱中する場合がしばしばあります。あるいは、受験そのものに疑問を覚えたり、エリートを志向することをきっぱり拒絶したりして、たちまちのうちにドロップアウトしてしまう事例もよくあります。しかし、それだからといって、その後の人生が駄目になってしまうという事はありません。もっと、ユニークな人生、もっと快適な生き方、もっと気に入りの暮らし、もっと充実感のある生活を、それぞれ創造できるのです。人生の途次、ふとした事を契機に、猛烈に勉強し始める人たちがいます。そんな時に基礎学力さえあれば、独学でも、かなりのところまでいけるのです。医者と技術者になるのは制度的には今のところ無理ですが、他の仕事なら、ほぼ手にすることは可能です。別に仕事を変えなくても、いま勤めているところで、別の価値観なり、新しい知識なり、技術体系なりをマスターすれば、精神的・文化的に、今までとは異なった新しい内面世界を築くことが出来ます。時によれば、経済的に優遇される事があるかも知れません。基礎学力は、このように大学進学がお目当てではなく、もっと広い意味合いを持つ力なのです。確かに豊かな基礎学力は、その人の人生を、確かに豊かなものにしていく土台となる力です。」と教育アドバイザーとして、基礎学力を核とした教育論を展開している。私も、この考え方に異論はない。彼の、現場教師として長年、経験された教育者としての実感だと思う。ただ私は、音楽教育に関わってきた人間として、別な視点で考えてみたいのである。岸本流に言えば、彼の教育観で示された、子供たちにとって必要な三つの基礎能力の中で、二番目に提示された感応表現能力というものが、本来の人間教育の「核」になるべきものであり、したがって、21世紀に夢を開く若い人々にとって重要な「将来学習」の主要科目になるべきものであると私は考えているのである。つまり、岸本氏が提示した、生きる力としての三つの基礎能力の提示が、実は、個々独立した領域として、バラバラに修得されるものではなく、お互いが有機的に結びついて、それが「より良く生きる力」に結集されなくては、ただの能力可能性としての獲得で終わってしまうという事を強調したいのである。しかも「より良く生きたい」という願望を確かなものとして、意識すれば、一番目の体力・運動能力は、自ずと向上していくし、基礎学力も、身に付けたと思うはずである。要は、「生きる力」を喚起する意識が先ず大事で、同時に向上心に結びつく日々の、規則正しい努力が必要なのである。このような領域を教育の内容に置き換える手立てはないものか、21世紀の人間教育の在り方の基本についての新しい体系や内容などを模索してみた。

### 3. 生命を対象化する授業

いじめ問題を契機として、最近、命を大切にする教育とか、命を守る教育などというものが、教育関係者の口から一斉に叫ばれ出した。安楽死の問題などや、ガン告知の問題なども医学界で言われて久しい。そこで、「生命」というものを対象化し、構造的に解き明かしてみよう。そしてその神秘性を、子供たちに自らの内部（肉体と精神）の問題として興味深く捉えられる視点を持たせ、その先にあるバリエーションとして、私自身の音楽領域と結びつける指導方向性を探してみたいのだ。要するに、外から

の知識や刺激で、教育を行う方法の前に、自分を知る、人間を知る、生命を知る、地球を知る、という具合に、生命体系の環境の中で、自分さがしの旅に出るような教育課程の一つ考えれば、それを通して子供たちに、人間の無限の可能性や、生きる素晴らしさを分からせ、能動的な活力（生きる力）へと結集できる前進性や創造性を身につけさせる事ができると思う。そこで短絡的だが、先ず、自分が生命さがしの旅を試してみた。!→!→!→!→・生命そのものの始まりは、自己を複製して、増殖することを、唯一の目的とした核酸と呼ばれる物質（遺伝子）が出現してきた事に端を発している。遺伝子は先ず、生細胞を造り出し、それが、分裂し繁殖して生命個体へと進化し、やがて生命体としての活動を始めるようになる。つまり、生命が先にある、その設計図として遺伝子を引き出したのではなく、先ず、遺伝子が最初にある、その後生命が存在するようになったのである。話はややこしいが、理屈では生命の存在そのものが遺伝子の体系に隷属しているという事になる。生命の増殖は地球上にありとあらゆる生物を送り出してきた。私たちを含めて、地球上の生物が、今まで生き延びてこれたのは、実はこの遺伝子に操作されていた為であり、私たちの意志ではないという事になる。「もしも、この遺伝子が、その莫大な情報の片隅に、自己破壊を指令する言葉を溜め込んでしまったら、生命を破壊する遺伝子が出現してもおかしくない」と、木下清一郎はその著書<sup>(5)</sup>で述べている。その著述を読んだ時、一瞬、私は、生命感を失ったり、死に急ぐ現代の子供たちの事を考えていたのである。現代の子供たちの遺伝子の変容し、自己破壊を指令する遺伝子に変わってしまったら、その将来や、更に先へと続く子孫の未来社会は想像を絶する事になる。しかし木下は、次章で、「心」が遺伝子を越えたモノである事の可能性に迫っている。それは科学者にとっての大冒険である。そして、その流れの中から、人間の素晴らしさと、新たな教育の可能性を引き出すのが、今回の私の論文のテーマである。

#### 4. 心への進化

生物学は今、一つの危機にあるらしい。何故なら、生命が遺伝子の言いなりという立場からは、生命の尊厳とか、人間の生きる意味とかいうものは生まれがたいからである。遺伝子が、一個の組織であるなら、生命も、遺伝子主導の構造論、機械論で片付けられてしまう。遺伝子の指示は、当然、脳や神経系にも及ぶことになる。しかし第一章でも述べたように（類人猿と人間が分かれたのは、DNAの問題とは別のメンタリテイの問題・云々。）例え、遺伝子の指示通りに作られたものであろうとも、その機能は、遺伝子を越えられるという事を、ここで実証的に説明しなくてはならない。木下は次のように説明する。「確かに、脳の働きは、遺伝子を越えていると考えられる。その働きを「心」と定義しよう。心の最初の兆しは、脳が記憶を持ち始めた時点である。記憶とは、ある事象を情報として蓄え（記録）、この情報を再び取り出す（想起）という二つの事が合わせて行なえるようになる事を言う。これがあってはじめて、新たに入ってくる情報と過去の記憶との照合が行なわれ、ある判断が出てくる事になる。それに伴って、もう一つ、照合に際しての満足度のようなものとして、「感情」が現れてくる。判断と感情の最初の出現は、記憶の形成と時を同じくしており、その後、判断の複雑さが増していくにつれて、感情の複雑さもその度合いを増していくというように、心は、次第に複雑になっていく。このように記憶ということは、この先の心の進化の議論の中で、核心的な位置を占める事になる。もう一つ知られているように、記憶を伴わない中枢神経系の働きとして「反射」がある。ある刺激に対してある決まった応答、つまりいわゆる「紋切り型応答」だけが可能である。この形式の応答は、心の働きとはしない。分かりやすくする為に、例えば「動物に心はあるだろうか」という命題で、実際の進化にそって、その生命の動きを追ってみよう。無脊椎動物の単細胞生物では、細胞内部の物質分子がやりとりを行ない、そこにコミュニケーションが可能になった時、「走性」という能力によって行動が決められてくる。多細胞生物になってくると、神経系が発達し、それと並んで、もう一つの内部環境を決めている要因が頭れる。それは内分泌系を主体とする液性の細胞間コミュニケーションで、これによって生物体のすべての内部細胞が浸され、内部環境が定まり、全体として、例えば平穏な状態とか、あるいは、緊張の状態

とかいったものがみなぎるわけである。これは心とは呼びにくいのだが、それでも何か心との間にひっかかりがあるように思われる。そこで、ここだけの独特の言葉づかいとして「気分」がただよっているという言い方をさせてもらおう。たぶん動物の世界には、この「気分」という状態が広く行き渡っており、その気分を持つことによって行動が決められる。つまり液性環境が、それを決めるのである。高等動物になると、神経系の発達と共に、そこに「心」が上乘せされていくのであるが、(ついでに言えば、植物とはこの気分をみの世界に生きている生物とみる事も出来よう)液性環境で気分が支配され、行動していた動物は、その後の進化で、さらに神経細胞が分化してくる事により、先ず「反射」という応答が生まれる。そして、この速やかではあるが一本調子であり融通のきかない反応を営みながら外界に対応しているうちに、神経系の中樞化の程度が進んで脳が現れてくると、そこに記憶という全く新しい働きが生まれてくる。記憶とは、過去の経験と対比する事を意味するから、動物はそれまでに経験した事と引き比べて、まだ経験したことのない事をも判断出来るようになる。気分、反射、記憶、照合と進んできて、この最後の段階から「心」がはじまったと視ることにしたいというのが、私の、今取ろうとしている立場である」と大変魅惑的な話を展開している。人間の細胞も、もともとは、単細胞生命体から直接に、進化したものであるから、生命から心への進化は、原始生命体から現代の人間へと、一直線につながっているのだ。そこで、先ほどの木下氏の話の、続きを自分なりに考えてみる。

## 5. 心の独立と神経系

前章で、生命が心を生み出していく段階を細かく見てきたが、ひとつ不思議な事がある。どうして細胞がコミュニケーションを行なうのか、という事である。その事には、木下氏も触れてない。例えば物質の世界でも、素粒子が原子となり、原子が分子となり、分子が化合物となるのははっきりしているが、素粒子が意志をもって分子や化合物を作ったとは科学では言えない。しかし、電子という何らかの意志をもった媒体が存在することは証明済みである。その事を有機体に当てはめると、全く同じような問題が出てくる。すでに触れてきたが、多くの細胞から成る個体が、一つの有機体である為には、個体の隅々にまで目を配って、全体をまとめる役割を担う「系」の存在が必要である。つまり、個体の統合原理が細胞のコミュニケーションに他ならないとすると、そこで取り交わされるシグナルの種類により、神経系、内分泌系という「系」が出来上がるらしい。このネットワークの確立も、結局は、不思議な生命エネルギーの媒介によるもので、もはや神の領域に近いような気がする。この、神経系、内分泌系の統合領域がはっきりすると、ここに「自己」が確立され、その中へ「他者」が自由に出入りすることは難しくなり、ついに他者を排除する系を備えるようになる。それが「免疫系」である。この三つの系を比較すると、外界の変動を感知して、内部環境を一定に保とうとする能力は、三者ともに備わっているが、過去の事象を一種の経験として蓄えておき、これを将来の変化に対応させる能力(広い意味での記憶)となると神経系だけとなる。この神経系というものが、さらに複雑に中樞化された「脳」というものの重要性が、ここで浮かびあがってくる。

## 6. 脳が存在

外界の変動を感知して、将来の変化に対応する能力というものは、脳にも心にも、時間を媒介とした層状構造があり、互いが微妙に対応できる事に要因があるらしい。例えば、遺伝子による生命維持装置と、それに対応する判断制御装置の組合せなどは、その顕著な例だ。餌を取ろうとする生命維持と、危険を伴うから怖いと、慎重に様子を窺っている自己制御装置の葛藤は、動物から「本能」を引き起こす。気分、反射、記憶、照合と進んできた生命から心への旅は、やがて心の進化の領域に入ってくる。記憶から発して、再び記憶に戻る情報の記憶は、次々に増幅していく。ここから記憶は、新しい段階に入る。つまり「エネルギー」を使って記憶の内容を呼び出したり、いま遭遇した記憶と対比させたり、照合したりする記憶は、どんどん増幅されていく。この営みは、限りなく続く。生命の遺伝子が、細胞、個体

へと核分裂を起こす有機体としてのエネルギーが「自己触媒」となり、「心」の進化にも現れる。しかし、改めてこの「自己触媒」となるエネルギーがどこから来たのかと考えると、科学的思考の歩みは、はたと止まってしまう。それと同時に、更に、この自己触媒にブレーキをかけ調節する能力の「自己制御装置」も、結局は最初から機能しており、この二つの相互機能を考えると、まるで、科学と、次元を異にした新しい世界に放りだされてしまう。自己増殖と、判断機能という両者の間に割って入る不思議なエネルギーの増殖が、動物の「本能」から、人間の「本性」へ、更に心の進化へと変わり変わっていく、その部分にメスを入れようとしても、結局、科学は、ここで、その道を塞がれてしまうのだ。長々と、生物学における生命と心の構造的分析を引用してきたが、そろそろ、ここで話を、生物学から教育に戻さなくてはならない。私が、考えないといけないのは、現象構造としての生命ではなく、自ら働きかける、感情の「輝き」としての「命」なのである。

## 7. 構造主義から生命主義へ

考えてみれば、現代の思想の中心は、構造主義である。科学万能を中心とした、長期に渡る高度経済成長時代の流れの中で、人間も、社会も、思考さえも、構造化された複合的総体であり、それらは、すべて合理化、機能化へ向かって統一されていく。現代のコンピューター技術がその象徴である。行き着く所、人間の心までメカニズムの網にかけてしまう。すべての領域で、技術万能、能率万能に向けてのデータ集積が行なわれ、そのおびただしいデータの分析と統合の繰り返し、子供たちの日常生活まで支配するようになった。ファミコンゲームにしか熱中しない近視の子や、成人病にかかる子供たちが出てきたり、人間以外の生き物に触れ合う機会のない機械人間化した子供たちの情報は、テレビや漫画だけで、そこでは短絡的で、刹那的なニューアイドルたちの歌や、ドラマがヒットしている。壮大な地球の歴史の中で、自然を糧とし、克服してきた人間が、自然と対話を遮断し、今や、産業ロボットに頼るような、機械的な環境で、もはや生命感などというものは、無駄なもので、故障したら修理すればいい、生命だって機械の維持装置に委ねられている、といったような現代の状況で、それとは逆に、素朴に自然や環境と同化し、共生するという思想も、新たに芽生えてきた。人々は、周囲を見渡せば、命の輝きはいくらでも発見できる。科学主義の構造から、人間はもう一度、自然に帰化し、古代の、大航海をした祖先を見習って、人の生命の始まりとか、地球とか宇宙の拡がりについて考える事が必要になってきた。この機械化から自然化への転換によって、新たに、生命の神秘とか、感情の不思議さとか、科学の入り込めない世界と向き合い、そこに価値を見い出す必要がある。そして、科学と神秘をどうバランスをとって統合出来るかが、これからの脱構造主義の課題である。万能と思えた科学でも立ち入れない領域のある事は、例えば、先ほどの生命の構造分析でもはっきり分かる。いかに現代の最先端科学をもってしても、今だに解明出来ない。医療技術にしても、がんを防ぐ事が出来ないように、生命と死に関しては、構造主義は立ち入れない。我々の周囲に、不可解な事は、いくらでも存在するが、先ず人間が、なぜ存在するようになったか、人はなぜ死ぬのかという、我々の自分自身の存在と消滅を厳粛に捉えていく事から考え、本質的に納得していく必要がある。例えば、物質構造を徹底的に分析したら、細胞核の回りを、不思議な電子というものが飛び回っている事を、科学は発見した。しかし、この電子がなぜ存在し、何者なのか、誰も知らない、というような神秘的な話から始めてもよい。人間は、自分の誕生だって、理由づけは不可能なのだ。ここからは、創造の世界だ。そこで私は、21世紀の脱構造主義に向けた「生命主義<sup>6)</sup>」なるものと、音楽教育の接点について考えてみたい。

## 8. 生命主義について

生命について語ることは、いつも不可避のパラドクスを招き寄せる。つまり生命を土台にして発生した意識が、生命を自己の中に取り込もうとした時から、すべてのパラドクスは始まる。要するに、生命を意識することは、意識することも生命活動であるというパラドクスに相對するのである。意識すると

いう事は、そこに意味づけを必要とするが、私の考えでは、意識するという事は、人間が誕生と同時に備えていた原始時代からの本性であり、「生命」とは、それと表裏一体の二重構造とし、「生命の意識体」として「形態」に置き換えて「意味づけ」が出来る。それは、渦巻き状と、網の目状の二つの構造形態として表現提示できる。遺伝子はすべて、らせんの二重構造を持っており、銀河系宇宙なども、先ほど述べてきた、有機体の「系」と、全く同じような、網の目に張りめぐらされた形態の、二重構造を持っている。それらを「生命とその増殖」を象徴する統合体としての、形態の象徴として捉える事が可能だ。私は、以前に、別の私論<sup>7)</sup>で、素粒子論の定義（物質は、一つの原子から核融合によって、他の原子や分子へ結合されていく。次の段階で、原子や分子が、さまざまな物質に結合されていく。この結合する時の物質化の、原動力になっているのが、原子の中を飛び回っている、電子の働きによる電磁気力という不思議な力<エネルギー>にあるらしい・・・）を借りて「物質に原子や電子、核融合があるように、例えば、音にも、音の原子があり、その中を「意識」という「電子」が飛び回り、音と音の原子が「意識」という電子により核融合を起こし「音楽」という「生命体」が誕生した」と仮説をたてた。音の電子を「音子」と名付け、光の粒子を「光子」と、設定することにより、「音子」、「光子」という、2つの「生命粒子」が誕生する。これが、私の考える生命主義の原点である。この2つの粒子で、生命と創造の話をつらぬいて進めよう。旧約聖書の「はじめに光ありき」の如く、光は、すべての物に注がれる事により、対象としての形を写し出す。つまり、存在の確認には照射する光が必要なわけだ。結局、暗闇に物があっても、光が当たらなければ、その物の存在は見えない。美術では、その事を印象主義に結びつけた。音に関して言えば、「音」そのものは全く見えない。しかし、我々は、周囲で、常に音の存在を感じて居る。暗闇でも、音を聞き、生命の存在を感じる事が出来る。特に、暗闇での音は、不気味なほどの存在感がある。音楽教育に於ける生命主義とは、音による生命存在感の感得を最初のスタートとするが、音楽のみでなく、他の教科に於いても、すべての生きし、生けるもの、存在するものに働きかけて言葉と、イメージで語りかける事により、対照と、自己との関係を認識し、より良き未来へ向かって積極的に生きていく学習と思考方法を獲得するという捉え方を、身につける事が出来るような教育、生命主義をそのまま生きた音楽へと翻訳できるような音楽教育など、意識を網の目のように張りめぐらし、自分なりの意識と生命感を、言葉のらせん二重構造として生命科学の構造に引っかけ「文章構造化」してみたのであるが・・・。理論のもつれで、結論らしきものも出せないまま、断腸の思いで、文を閉じることになった。

## 結 び

楽譜は、音符を五線譜の上に自由にばらまいてあるように見えるが、じつは、そこに音の調性機能やリズム機能や、主題による統一などが隠されている。しかも、それは、演奏という時間を媒介とするエネルギーによって、過去と未来の狭間における、瞬間、瞬間の輝きで示されことにより「音楽」というものに到達するのである。私は、教育も、人間も、その瞬間、瞬間で輝いているような行き方を理想とする、まさに、生命の在り方の理想のモデルとしての「音楽的在り方」を中心テーマにまとめたいと考えていた。しかし、自らの引用文献の咀嚼や、論理的構成の関係づけが貧弱で、多分に無理があった。ただ、言い訳がましいが、気楽に、音楽でも聴くような気分で、この文章を読んでいただいて、ある特定の「気分」になった時、多細胞生物の「内分泌系」による「ある気分が漂っている状態」という文章を思い出していただけたら、少しは読んでいただいたことの意味が、見つかるかもしれない。

〔完〕



## <引用文献>

- 大貫 良夫監修「民族移動と文化編集」NTT出版（1993年）  
岸本 裕史 改定版「見える学力、見えない学力」大月書店（1996年）  
木下清一郎 「心は遺伝子をこえるか」東京大学出版会（1996年）  
永山 哲男 「音楽と生命と宇宙」島袋哲教授琉球大学退官記念論集より（1995年）

- 脚注 1 大貫良夫監修「民族移動と文化編集」 引用文献を参照  
脚注 2 1945年生まれ、京都大学理学部助教授 専攻は「形質人類学」と「先史人類学」で、引用文献「民族移動と文化編集」の著者の一人  
脚注 3 1930年生まれ、神戸市小学校教員を経て、「見える学力、見えない学力」という学力観を提唱。90年退職後、教育アドバイザーとして活躍、「見える学力、見えない学力」の著者でもある。  
脚注 4 岸本 裕史 「見える学力、見えない学力」の改定版、まえがきを参照  
脚注 5 木下清一郎 「心は遺伝子をこえるか」 引用文献を参照  
脚注 6 鷲田小彌太 「現代思想がわかる辞典」 日本実業出版社（1994）の第18章、タイトルより借用する  
脚注 7 永山 哲男 「音楽と生命と宇宙」の第2章より、引用する。（島袋哲教授退官記念論集1995年）